月刊

こころのとも

第六巻
十月号

平のつく語

いま平成の御世
平が上につく語

平等
平和
平安

毎日
毎日
祈りたい

かくありたい

人間とは
かくありたいと願う
動物である

人生を考え直して みたい人は（二二）

―『老子』解説（二一）―

今月号は七十八章を取り上げます。

（第七十八章）世の中に水ほど柔弱なものはありません。なのに堅強なものを攻めるのに、これにまさるものはないのです。それは、どんなものも水の柔弱な性質を変えることができないからです。

このように、弱いものが強いものに勝ち、柔らかいものが剛いものに勝つ、ということは、世の中に誰も知らないものがないのに、実行できる人はいません。

だから聖人は言います。「一国の垢を引き受けるものをその国の主人と言い、諸国の不祥を引き受けるものを天下の王と言います」と。

真に正しい言葉は、一見、反対のようにみえるものです。

この章は、水を例に挙げて、道を説いています。あまり難しいことばはありませんが、深い真理を述べています。順次、解説して行きたいと思います。

最初の節では「水ほど柔かく弱いものはないのに、堅く強いものを攻めるのにこれに勝るものはない、それは水の性質を変えるものがないからだ」と言っています。

これは、水は「弱いのに、強い」という矛盾した性質をもっていることを例としてあげているのです。

水が柔弱であることは、多言を要しないと思いますが、例えば、水は相手に合わせてどんな姿にも形を変える事が出来ます。例えば、入れられる容器に合わせてどんな形にもなれますし、また、熱に会えば蒸発して一見無くなったように見えますが、天に昇って雨になり再び地上に降りてきます。また、冷やされれば、凍って液体から固体に変わりますが、温められれば再び、液体に戻ります。さらに、高い所へ置かれれば、重力に従って低いところへ移動しようとして流れ出して行きます。このように水は重力に逆らわず、姿も環境に応じてどんなにでも変わることができるのです。

しかし、最後に述べました重力に逆らわない性質は、水が大きな力を生み出すもとになっています。本章に述べています、柔弱なのに強固なものを打ち負かすのは、一つには、その移動する力が強大なエネルギーとなるか

らなのです。現代では、ダムを作りこの力を発電に利用しています。またダムは、洪水を防ぎ、人間が生活するための水の需要を満たす重要な役割を担っています。

では、私たちの生活の中で水がどんな働きをしているのか、そしてその重要さと偉大さはどれほどか、具体的に考えてみたいと思います。

一番さきに思い付きますのは、水不足に関するものです。お大師さんのお生まれになられた香川県は四国でも降水量が少なく、また地形的に大きな川がありません。ですから、お大師さんの改修された満濃池をはじめとする、ため池がたくさんあります。でも、干ばつがあれば、すぐ水不足になり「讃岐砂漠」が出現します。そうなりますと、水の有り難さ、水の偉大さをいやというほど感じさせられるわけです。水がなければ、人間のどんな強固な生活も成り立ちません。たとえ堅固な城を築いてたてこもろうと、雨が降らず、水も断たれれば出て降伏する以外にはないのです。

次に、水が多すぎるという逆の場合もあります。雨が降り過ぎて、洪水になったり、地震によって津波が来たり、台風で大波が押し寄せたり、攻撃するために、川をせき止めて水を貯めたりするという場合です。どんな堅固なものも水の勢いによって押し流されたり、陥没させられたりするのです。

お城を攻めることでいいますと、豊臣秀吉による備中高松城の水攻めが有名です。また、繁栄を誇った強固なヨーロッパの都市が、地殻変動によって一夜で海の底に沈んだ例も歴史に残っています。なお、洪水や津波、台風の脅威の実例は枚挙にいとまがあいほどあります。

また、ことわざとしても「あまだれ石をうがつ」「水滴石をうがつ」というのがあります。柔らかい水が、永い間には堅い石に穴をあけるという意味です。

次に進みます。次の節では「水のように弱いものが強いものに勝ち、柔らかいものが剛いものに勝つ、ということは、世の中に誰も知らないものがないのに、実行できる人がいない」と述べています。

この「弱いものが強いものに勝つ」と同様のことは、既に先々月（八月号）で紹介しました第七十六章にも述べられていました。ご確認下さい。

少しだけ補足しておきますと、『平家物語』にもありますように「おごる平家は久しからず」なのです。いかに栄華を誇り、天下を我がもの顔にした平家も、源氏によって間もなく滅ぼされてしまいました。

何故なのでしょうか。いろいろ個別な原因は分析できると思いますが、大切な要因は「おごる」ということで

す。人間というものは、自分が偉いとか、自分はできるとか、自分は力があるとか、自分は金持ちだとか思った途端、実は「こころ」が貧しくなりはじめているということです。「人の心を感じるこころ（他己）」の方は飢えはじめているのです。別の言い方をすれば、自分が自分で付けた「こころの垢」で窒息しているのです。そして最後には、遂にこころ（他己）は死んでしまうのです。そうなりますと、他者のことも、自分のことも、客観的に見えなくなり、社会の中で自分のなすことが分からなくなってしまうのです。そして、悪ばかりをなすことになるのです。それが、「おごる平家」の行く末を創りだしたと言えるわけです。

このように、強者と呼べる人たちは、強者になることで他己を喪失し、やがて、弱者であった人たちによって滅ぼされていくのです。そしてまた、滅ぼした人たちが、自らを強者として、やがて再び滅ぼされる運命を背負うことになるのです。これまでこうした栄枯盛衰が、人類の歴史の中でどれほど繰り返されて来たことでしょう。

しかし、ここで言う「実行できる人がいない」という「弱いものが強いものに勝ち、柔らかいものが剛いものに勝つ」という言い方は、だだ、誰でもが知っている、時間の流れの中で生まれてくる、相対者の相対的な力の差による、単なる栄枯盛衰についてだけ述べているのではありません。もっと深い真理を含んでいるのです。だから、誰でもが実行できがたいのです。

その深い真理とは、ここで述べている「弱い・強い」とか「柔らかい・剛い」ということばの内容に関わることなのです。一般に、強い・剛いと言いますと、既に述べましたように、力、つまり様々な能力、腕力、武力、権力、財力、があることを形容しているように思われます。また、弱い・柔らかいと言いますのは、その逆のことを言っているように思えるのです。

しかし、ここでいう深い真理を述べる時には、そうではありません。難しいかも知れませんが、強い・剛いと言いますのは、矛盾的に、いわゆる強者にいわゆる弱者が勝っているのは、こころの状態であって、それが強い・剛いと言っているのです。それは、究極的には、ここころの中の安心立命の境地のことなのです。勝ち負けで言えば、その境地に至るとき、敵に勝つよりもっと難しい自分自身に打ち克つことができるということなのです。それは、実は、なにものによっても失われない、この章の水のたとえで言えば、どんなものも変えることができない性質、永遠（で無限で絶対）のいのちを頂くことでもあるのです。ですから、これ以上、強く、剛いものは

ないのです。

しかし、誰でもが、ものごころ付いたとき、こうした強く・剛い境地になれるわけではありません。そうなるためには、一般的な意味の「力」を付けるのではなくして、逆にそれを捨てなければならないのです。そうした力への執らわれ（＝生命への執らわれ）を捨てなければならないのです。そうして捨てた状態は、一般的な意味で言えば、弱く・柔らかいということになるのです。

逆から言いますと、いわゆる弱者と言える人ほど、力がありませんから、その分、こころの中に力への執らわれをもたなくてもよいのです。それだけ、こころは強く・剛いと言えるのです。

次の、「だから聖人は言います。『一国の垢を引き受けるものをその国の主人と言い、諸国の不祥を引き受けるものを天下の王と言います』と。」という部分ですが、この部分を読んだとき、私はキリストのことを思い浮かべました。キリストが生きていたとき、教えを説いた人たちは、多くは社会からはみ出した人たちでした。それは、犯罪者であり、売春婦であり、病人であり、貧困者だったのです。実は、その人たちこそ、ここで言う、一国の垢であり、諸国の不祥であると言える人たちなのです。キリストは、そうした人たちを、自らに引き受け、救おうとしたのです。まさに、キリストこそ、国の主人であり、天下の王と言える人だったというわけです。

勿論、その当時に、いわゆる主人と呼ばれる人も、王と呼ばれる人もいました。実は、その人たちによってキリストは、はりつけの刑に処せられたのです。ですから、その人たちは、いわゆる強く・剛い者であり、キリストは、いわゆる弱く・柔らかい者であったと言えます。

しかし、真実はその逆で、キリストこそこころは強く・剛い人、自らのこころの中に神の国を体現し、永遠のいのちを頂いた人であり、逆に、当時の人々から主人と呼ばれたり、王と呼ばれたりしていた人こそ、こころに執らわれの垢をこびりつけ、過ちばかり犯す、弱く・柔らかい人であったと言えるのです。

このように、キリストは、水のように、柔弱にこの世の状況に応じて死刑に甘んじましたが、しかし、こころには強く・剛い永遠のいのちを頂き、その当時の主や王のはるかに及ばない、多くの人を幸せにする強大な力を発揮したのです。これが本章の最後に述べている「真に正しい言葉は、一見、反対のようにみえるものです」という意味なのです。このように、ここで述べている言葉は、単に処世の術を意味しているだけではありません。深い真理を含んでいるのです。

自作随筆選

オウム事件の病理

一連のオウム真理教事件は、世の中に大きな衝撃を与えています。日本人の価値観にも大きな変革が起こっていますが、それがいよいよ表面化して来たことを示しています。

日本は単一民族の国だとされ、これまでは、治安がよい国とされてきました。ベンダサンというペンネームの人が書いた、かつてベストセラーになった日本人とユダヤ人を比較した本がありましたが、その中で日本人は、ユダヤ人と違って、安全と水はただだと思っている、と書かれていました。

しかし、その安全もいまや風前の灯火となりつつあります。これまでは、悪いことをする人はいても、それは社会的に不適応をきたしている例外的な人で、最終的には理解や了解ができるものと考えられてきました。ということは、基本的には、日本人の間には仲間意識が強く存在し、互いに信頼しあう関係があって、お互いに安全だと感じて来たということだと思うのです。

ところが、オウム事件は日本人のこうした信頼感・倫理観を根底から覆すような事件になったと言えます。つまり、オウム事件を起こした幹部連中の年齢や学歴、職業を見ますと、彼らは世間知らずの若者ではなく、十分分別のつく年齢であり、社会的にも不適応どころか、最も適応してきた、社会のリーダーとなるべきエリート中のエリートと言えるような人たちである、ということが分かります。

そうした人たちが、社会的にみて何ら悪をなしているとは思えない人たちを無差別に殺傷したわけですから、皆の驚きは、大変なものだったといえます。いまだに、毎日のようにニュースに取り上げられていることをみても、そのショックの大きさが分かります。こんなことは日本ではこれまで起こったことはありませんでした。勿論、世界の方々で、自分が信じる主義のために、あるいは自分の民族、国、宗教のために、自分たちに「敵対する人々」を無差別テロや武力行使の対象にすることはありましたが、日本ではそれさえも、めったに起こりませんでした。起こったとしても、了解ができるものだったと思います。

ところが、オウム事件では事情が全く違っています。「オウム真理教以外の全ての人々」が、自分たちに敵対

した存在として、滅殺すべき対象だと考えられていると思うのです。特定の対立する宗教（宗派）や対立する主義ではなく、いま自分たちの「教えを信じない全ての人々」が殺戮の対象となっているのです。これまでの判断基準からすれば、全く狂気の沙汰としか言いようがありません。こんなことは、世界にかつてありませんでした。オウム真理教を宗教だとすれば、まったく新しい宗教テロだと言えます。

では、何故こんなことが起こってきたのでしょうか。

今年の三月二十二日に教団施設への一斉強制捜査が行われて以来、マスコミやジャーナリストの様々な人たちがこの事件を解釈していますが、もう一つ的確さを欠いているように思えます。

たとえば、先日（九月十九日）「四国新聞」の文化欄に「戦後を超える思考」と題して、対談形式で、五回シリーズの最終回が載せられました。そこでの対談者は吉本隆明氏と加藤典洋氏でした。その中でオウム真理教事件を引き起こした現代の倫理観をめぐって話が展開されていましたが、この事件は結局、よく分からない、新しい倫理観が必要なことだけは分かる、ということでした。

でも、この失望とは別に、この記事の中に私がこの事件の発覚以来ずっと原因だと考えていたことを如実に示すような、現代の子どもの話が載っていて、とても興味を引きました。

それは、なぜ人を殺してはいけないか、について先生が子どもに教えるという道徳教育場面でのことです。

これまでは、不殺生戒の教え方としては、もし君の親が殺されたら、君は悲しいだろう、だから、人を殺してはならない、というもので、以前は、それで子どもも納得したということです。ところが、今は違う。

「僕のところはセーフティガードで、泥棒や人殺しは入ってこない。殺されたら悲しいと言うけど、僕のお父さんは絶対殺されないと思う。それが人を殺しちゃいけない理由だったら、僕には関係ない、僕は殺しちゃうと思う」。

加藤氏が言うには、今の子どもは、「殺されたら悲しい」ではなくて、「殺したら悲しい」と言わなければ納得しなくなっている。「殺したら君の中の何かが崩れて、もうお父さんや好きな人と、だべったり冗談言い合ったりできなくなるんじゃないか」という言い方がいる、ということなのです。加藤氏は「殺すことは『人のため』『社会のため』によくない、という善悪観ではもう駄目で、今後は、殺すことは『自分のため』によくない、という『自分』に立脚した、社会に寄りかからない、全く

新しいモラルが生まれてくると思います。」と言っていました。

驚きです。それは、加藤氏の事態の捉え方の不的確さもさることながら、子どもたちの心のあり方が、もうここまで来たのか、という点についてです。私も、最近の大学生が「自己」に閉じて「人の心を感じるこころ」を失って来ていることを感じていますが、これほどとは思っていませんでした。いま問題になっている学校でのいじめも、不登校の問題も同根の現象だと思います。

現代人が「他己」を弱め、「自己」を肥大化させていることは、再三にわたって指摘して来ましたが、こうした大人のこころの直接的な反映として、子どもがもっと正直に、かつ典型的に自己の肥大化を示しているのだと思うのです。

加藤氏の言う「人のため」「社会のため」とは、私のモデルで言いますと、まさしく「他己」であり、「自分のため」とはまさしく「自己」だと言えます。

ですから、加藤氏の「自分に立脚し、社会に寄りかからない、全く新しいモラル」とは、ことばでは言えますが、それこそ全く空虚で、矛盾した言い方だと言えます。モラルは元来が「社会的」なものなのです。人と人との関係のあり方がモラルなのです。倫理なのです。社会に寄りかからないようなモラルはあり得ません。人の痛みを感じるこころ、人の喜びを感じるこころこそが、モラルの基礎にはあるのです。自分と人（他者）との関係が社会ですから、人のことを考えないようなモラルなぞ、あり得ようがないのです。

そういう意味で、現代こそが、人の痛みや喜びではなくて、まず自分の利益（人権・権利）が侵されては困るから、人の利益（権利）も侵さないようにする、という自分に閉じた、つまり個人に偏った社会に過ぎないのです。そうした社会では、相手の力が弱くて、自分の利益が侵されそうにない場合には、容易に相手の利益を踏みにじることができるのです。先に引用した子どもが言うように、自分のお父さんが殺される危険がないとき、他者の痛みなぞ感じることはできないのです。それが、他己を弱めて来た、自己社会の行き着くところと言えるのです。そうなったとき、すでにモラルは喪失していると言わなければなりません。実は、そこにこそ加藤氏が言う「社会に寄りかからないモラル」の状態が出現していると言えるのです。それは、実は、社会の崩壊を意味しています。無法社会の出現を意味しているのです。

オウム事件は、加藤氏のいう、まさしく「社会に寄りかからないモラル」の実行なのです。

しかし、人間は、お互いが社会（他者）に寄りかかりながら生活しています。お互いが社会にこころを開き、社会に定位し、社会を信頼し、社会に寄りかかることで、心理的安定を得、幸福を得ているのです。しかし、悲しいかな現代人はそのことをいま忘れ去り、その大切さに気付きさえしなくなっているのです。

その原因は、ヨーロッパに始まる近代合理主義と個人主義の隆盛による、人間の傲慢化・絶対化にあります。人間が、人間の「あたま（理性）」を中心に、そして「自己（個人）」を中心に、宇宙を回そうとしているのです。その結果いま、自分自身の目が回って、宇宙に吸い込まれそうになっているのです。

人間が傲慢になるとき、自分（人間）の「生命」の拡張のみが目的になります。それは、自分の性欲（子孫繁栄欲）、自分の食欲（物欲）、自分の優越欲（ヒーローを求める欲求、勝利を得たい欲求、権力欲、名誉欲）への執着を生み出すのです。その時、他者は、自分の生命の拡張のためには、いつでも犠牲になるべき対象に過ぎなくなるのです。現代人は、人に愛をあげないのに、人から愛をもらいたがっています。相手に常に犠牲を強いようとしているのです。そうしないと、自分の精神的安定が得られないからです。

ですから、いま求められているモラルは、他者が悲しむから、あるいは他者が喜ぶから、エゴ（自己）の追求を制限し、生命の拡張を制限するという、「社会に寄りかかるモラル」でなくてはならないのです。注意して頂きたいのは、ここでは、発想が逆転しているということです。発想の出発点は、どこまでも自分ではなくて、他者になければならないのです。

そうしないかぎり、自己社会を他己社会へ回帰させることは不可能だと、私は考えるのです。

近代合理主義と個人主義が台頭する以前は、人間は人間を超えたものの力の脅威にさらされて生きていました。

ですから、その力に自然と随順して生きていたのです。つまり、人間に人間の力を超えて働きかけてくる力（それを神と呼ぼうと、仏と呼ぼうと、宇宙根源の原理と呼ぼうと、同じことです）に畏敬の念をもっていました。その力のままに生きることを心掛けようと、祈っていたのです。超越（絶対他者）を意識するとき、私たち人間は、皆平等に弱い存在として生きているのだということを知ることができます。私たちはお互いが、ただ超越によって生かされているに過ぎないのだと、知ることができ、それを信じることができるのです。その時、私たち

はお互いがこころを開きあうことができるのです。
麻原彰晃被告は、自己追求のための手段としてヨーガ（密教）を利用しようとしました。それは、身を滅ぼすものとして、密教がもっとも戒めているところなのです。

自作詩短歌等選

非難するこころ

人を非難するこころは
自らの
ねたみ
うらみ
つらみ
そねみ
から起こる

そのとき
自分は棚上げに
している

他己を失う

執らわれが
こころにあれば
無意識に
言動共に
他己を失う

秋刀魚

秋刀魚食べ
秋の魚の
味を知る

安心して死ぬ

安心して
死ねるということは

今を充実して
生きていける
ということ

今を完結して
生きていける
ということ

そして

このまま
お迎えがきたら
どんなに幸せかと
実感できる
ということ

えせ宗教家

能才な
えせ宗教家
はびこりて
ますます宗教
滅び行きけり

反省ができる

人間は
反省が
できる動物である

それは
自我が
あるから

業はまとい付く

法句経（七一）
もし人が
悪事なしても
その業は
絞りたてたる
乳のごと
すぐに固まる
ことはなく
徐々に熟して
固まって行く

積みし業
灰に覆われし
火のように
徐々に燃えては
いつまでも
愚者にまといて
悩まし続けり

傷つくくせに

自分は
一言いわれただけで
すごく傷つくのに
そういう人に限って
人には
平気できついことを
言う

他者おもう

他者おもう
故に
我あり

悪となり善となる

執らわれを
持ちたこころの
なす行為
一つひとつが
悪となりける

執らわれを
捨てたこころの
なす行為
一つひとつが
善となりける

鳥もねぐらへ

夕焼けや
鳥もねぐらへ
三々五々

苦行者は及ばず

法句経（七〇）
愚か者
たとい毎月
苦行者の
風にならって
一度だけ
断食しても
その功徳
真理その身に
わきまえし
人にはるかに
及ばざりけり

後記

一、今月号は「釈尊のことば」を休ませて頂きました。随筆「オウム事件の病理」をぜひ載せたいと思ったからです。今後、日本だけではなく、世界中でこうした事件が引き続き起こる可能性があります。原爆さえ使う集団が出てきても不思議ではありません。そうした傾向を止めるには、他己社会を取り戻す以外に方法はありません。

二、『老子』解説も今年で終わる予定にしています。毎回解説していますように、これまで取り上げた章は、とても深い真理を述べています。しかし、老子に関する、これまで入手した本（古本で買ったものが大多数）は、古い年代のもの、新しいもの、取り混ぜて四十冊ほどになりましたが、残念ながら、老子の思想を真に捉えていると思えるものはありませんでした。できたら、これまで連載してきたものをまとめて、一冊の本にして出版できたらと思っています。

三、古本屋さんを、毎月何回かはのぞいていますが、最近、古本屋さんの店舗が大きくなっています。岡山の「万歩書店」のことは紹介しましたが、岡山だけではなく、その他の地方にも様々の店がチェーン店として、大規模店をいくつも新設しています。徳島にも沖の洲辺りに、私のよく知っている人が「モウラ」という店舗を今までの隣に移転、拡張しました。二十万冊ぐらいは陳列されているのではと思います。私の本も特別に陳列して下さっています。

四、大規模店は、マンガ、成人用図書などが多数を占めるのですが、私が買うような専門書も時々出ています。しかも一冊百円均一（沢山の陳列あり）の中に入っていたりしていて、助かります。また、値段の競争も激しく、どんな本も五冊以上だと定価の二五％になるところもあり、三分の一、四〇％、半額といろいろです。しかし、こんなに安くて商売になるのかと思います。こちらはこの値引き合戦がいつまでも続いて欲しいのですが。

月刊　こころのとも　第六巻　十月号（通巻七十号）

平成七年十月八日
〒772―8502
徳島県鳴門市鳴門町高島
鳴門教育大学　障害児教育講座気付
（ひびきのさと　沙門）中塚　善成（ぜんじょう）

本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名　ひびきのさと　口座番号０１６１０―８―３８６６０